

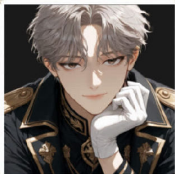
登場人物

Portrait

白の妃(ヒロイン)

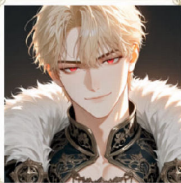
没落貴族の令嬢。国王の強大すぎる魔力を安定させるため、魔力を供給する器である『白の妃』としての任に就いている。王に抱かれるのは愛のないただの義務だが、家と国を根底で支える立派な公職だと誇りを持ち、身を削って耐え忍んでいる。

王宮で孤立しがちな彼女にとって、優しく支えてくれる専属騎士のノエルだけが唯一の心の拠り所。



ノエル・ローエングリム

名門ローエングリム家の次男であり、白の妃の専属騎士。ヒロインの幼馴染。家が没落してからでも変わらず彼女に寄り添い、どんな時でも甘やかしてくれる温厚で優しい青年。騎士として常に彼女を護衛しているが、それ同時に『毎夜、扉の向こうで彼女が王に抱かれるのを聞き続ける』という過酷な任務でもあり……。



ジークハルト・ヴァレンシュタイン

圧倒的な魔力で結界を張り、国を守護する冷酷な若き国王。この国の王は代々、己の命を削るほどの巨大な魔力負荷を背負っており、それを安定させるためヒロインをはじめとする特殊な魔力を持つ女たちを『妃』として迎え入れている。極めて合理的な為政者であり、妃たちを単なる魔力調整の器と割り切っているため、情事の最中も一切の感情を見せない。

重厚な天蓋ベッドが微かに軋む音と、ひどく冷ややかな吐息だけが、夜の王室に響いていた。

「あっ、ん……っ、ひ……」

乱れたシーツをきつく握りしめながら、私は必死に声のボリュームを抑え込んだ。それでも、熱を帯びた身体の奥を容赦なく抉られるたび、甘い痺れと共に情けない嬌声が漏れてしまう。

私の上に覆い被さるこの国の王、ジークハルト陛下は、一切の感情を排した赤い瞳で私を見下ろしていた。

金糸のような短い髪が私の頬を掠め、整いすぎた冷徹な美貌が近づく。けれど、愛撫のキスが落ちてくることはない。彼はただ淡々と、最も効率的に私から魔力を引き出すための手段として、執拗に私を責め立てる。

これが、白の妃に任命された私の『職務』だ。

この国は、絶大な王の魔力で自国を守っている。王に魔力を供給するために、王に抱かれる——それがこの国の『妃』の役目。家と国を守るため、私は自らの意思でこの公職に就いた。誇りを持ってこの身を捧げているのだから、王に愛される愛されないなど、欠片も気にならなかった。

けれど——ただ一つ、私の心をひどく掻き乱すものがある。

(ノエル……っ)

ひとときわ深く最奥を突かれ、背を反らせながら、私は視線だけを室内の奥——固く閉ざされた、分厚い木扉へと向けた。

あの扉のすぐ向こう側には、私の専属騎士が立っている。

アッシュグレーの短いウェーブヘアに、優しげに垂れた目尻。ノエル・ローエングリム。由緒正しき名門貴族の次男でありながら、私の幼馴染としてずっと側で支えてくれる優しい人。

私が白の妃を務めることになったと知った時、彼は誰よりも早く志願して、白の妃の専属騎士という立場になってくれた。王室へ向かう廊下を共に歩き、夜伽の部屋へと送り出し、そして終わるまであの扉の外で待ち続ける。それが彼の務めでもあった。

「はっ、あ、んっ……、い、や……あ……っ」

王の指先が巧みに私の弱い部分をこねくり回し、同時に下半身が激しく打ち付けられる。快樂の波が頂点へと押し上げられ、私は耐えきれずにシートに顔を埋めた。

一切の愛など存在しない義務だけの行為で、こんなにも乱れた声を上げている。その事実が、扉一枚を隔てたノエルの耳にも届いている。

（……お願い……聞かないで……）

そのことが申し訳なくて、胸が締め付けられるように痛かった。

幼い頃から変わらず優しいノエルは、どんな時でも私を気遣い、傷つかないようにと守り続けてくれた。扉の向こうで耳を澄ませている彼に、私のこんな情けない声を聴かせ続けるのがたまらなく恥ずかしい。申し訳なさで胸が締め付けられ、熱いものが込み上げてきた。

「……っ」

陛下が低く息を吐き出し、私の中に熱い飛沫と共におびただしい量の魔力が流れ込んでくるのを感じた。自身の白の魔力が彼の体液と同調していくのが分かる。

そして——深く繋がったままの結合部を伝い、今度は私の魔力が彼へと引き上げられていく。体内で混ざり合った熱を道標にして、白の魔力がドクドクと王の身体へと戻っていく。

王の乱れていた呼吸が落ち着き、彼の身体中に白の妃の魔力がみ

なぎっていく。

事後の余韻など何一つなく、陛下はあっさりと私の身体から自身を引き抜いて立ち上がった。

毛皮のマントを無造作に羽織るその後ろ姿に、私は震える身体を起こして深く頭を下げる。

いつもなら言葉を交わすこともない。ただの業務として、魔力供給の儀は終わるはずだった。けれど今夜、扉へ向かおうとした陛下がふと足を止め、こちらを振り返った。

「……いつもすまないな。妃達には、ひどく重い役目を押し付けている」

「へ、陛下……」

「お前の白の魔力にはいつも助けられている。……どうか、俺のために耐えてくれ」

感情の読めない赤い瞳。けれど、そのひどく優しい言葉に、酷使された心身の痛みがふっと和らいでいく。冷徹に見えるこの方も、本当は国の重圧に苦しみ、私を必要としてくださっているのだ。

ならばこの身が壊れようとも、王のために身を捧げよう。

静かに部屋を立ち去る陛下の背中に向かって、私はもう一度深く頭を垂れた。

与えられた湯浴み用の水で身体を清め、簡素なドレスに着替える。まだ足元がおぼつかないまま、私はゆっくりと重厚な扉に手をかけた。

重い音を立てて扉が開くと、ひんやりとした廊下の空気と共に、

見慣れた近衛騎士の礼装が目飛び込んでくる。

「お疲れ様。……今日も、よく頑張ったね」

ノエルだった。彼はいつものように、ふわりと安心させるような優しい笑顔を私に向けていた。

「ノエル……待たせてごめんなさい」

「君が謝ることじゃないよ。さあ、夜は冷える。これを」

ノエルは自身が持っていた厚手のショールを、私の肩にそっとかけてくれた。その手つきは昔から変わらず、壊れ物を扱うかのように丁寧に優しい。

けれど、ショールの端を整えようとした彼の手が、ふいに止まる。

「ノエル……？」

「……」

ノエルは無言のまま私の首元に手を伸ばした。ショールから覗い

た私の首筋を凝視していた彼の顔が、みるみるうちに強張っていく。

「……………」

そこに何かがあるのかに思い至って、私は思わずノエルから顔を逸らした。

（……………恥ずかしい、なんて……………思っではいけないわ……………）

これは白の妃として、職務を全うした証なのだから。

けれど、私の肌に触れる彼の指先が、微かに震えているのが分かった。その震えが伝わってきて、胸の奥が締め付けられるように痛んだ。

ノエルに王の情事の痕跡を見られるのがここまで辛いなんて——
彼はしばらくの間、私の首筋を、壊れ物を扱うような手つきで撫でていた。沈黙が部屋を支配し、壁にかかった古時計の刻む音だけが響く。

やがて、ノエルがゆっくりと顔を上げた。

真っ直ぐに見つめてくる瞳に、痛みが滲んでいるように見えた。

「……こんなこと、いつまで続ける気？」

「……いつまでって……私は、白の妃として……」

「妃だって？ 夜伽をして、ただ魔力を搾り取られるだけの存在が？ 君だって、こんなのおかしいと心の中では思ってるだろう？」

「……不敬な発言はやめて、ノエル」

私は語気を強め、彼の言葉を遮った。

この国は、ジークハルト陛下の強大すぎる魔力によって張られた結界で外敵から守られている。けれど、その莫大な負荷は王一人の命を簡単に削り取ってしまう。

だからこそ、私のように特殊な魔力を持つ女たちが『妃』に任命され、夜伽という儀式を通して王へ魔力を注ぎ、その負荷を軽減さ

せる必要があるのだ。

複数の妃たちが国に、王に身を捧げること、この国は成り立っている。それは決して理不尽な生贄などではなく、国や国民を支える名誉な公職だ。

「……私はただ、自らの意思でこの職にあるだけよ。誰に強いられたいわけでもないわ」

私にだってわかってる。『妃』とは名ばかりで、王にとって私はただの魔力供給の器に過ぎないことくらい。それでも、没落しかけた家を救い、この国を根底で支えているという自負だけは、私の中で決して揺らぐことのないものだった。

「辛くなんかないわ。これが私に与えられた、白の妃としての『誇り』だもの」

言葉にした瞬間、私の背筋は自然と伸びた。彼に心配をかけては

いけない。私がここで弱音を吐けば、彼の優しい心を乱してしまう。
ノエルは微動だにせず、私の笑顔をただ凝視していた。その瞳の奥に宿っていた揺らぎが、一瞬にして凪いだように見えた。深い静寂が流れる。彼はふっと、自嘲するように口角を上げた。

「……そう」

短く呟いた声は、すべての感情を削ぎ落としたように冷え切っていた。

彼はゆっくりと上体を屈め、逃げ場を塞ぐように私と視線の高さを合わせた。いつも穏やかな光をたたえていたはずのアッシュグレイの瞳に、底の見えない暗く濁ったものが沈んでいるのが垣間見えた気がして、私は背筋を凍らせた。

「誇り、か。……残酷だね、君は」

かすれた呟きは、ひどく冷え切っていた。ノエルのこんな、底冷

えするような声を聞いたことがなかった。

けれど口を開こうとした次の瞬間には、ノエルはふっといつもの柔らかな微笑みを浮かべていた。

「少し休むといいよ、白の妃殿下」

彼が私の役職名を口にしたのは、それが初めてだった。

そのまま一礼して静かに部屋を出ていく背中を見送りながら、私は胸の奥に言い知れぬ不安を抱えていた。

それから数日が過ぎた、ある日の昼下がりに。ノエルと私は城の中庭を繋ぐ回廊を歩いていた。陽光が石畳に鋭い影を落とし、冷やかな風が頬を撫でる。

隣を歩くノエルの足取りはいつも通り静かで、私の歩調に合わせてゆっくりだ。あの夜の不穏な気配は微塵も感じさせず、いつもと変わらぬ穏やかな笑みを浮かべていることに、私は密かに安堵していた。

ふと、前方から話し声が聞こえてくる。豪華な礼装に身を包んだ貴族たちが、三、四人の集団となってこちらへ歩いてくるのが見えた。いずれも王宮で派閥を作る、権力欲の強い高位の男たちだ。

彼らは私と目が合うと、わざとらしく立ち止まり、道を塞ぐように並んだ。

「おや、これは白の妃殿下ではありませんか」

恰幅の良い中年の貴族が、侮蔑を隠そうともせず、鼻で笑った。そのねっとりとした視線が、私のドレスの胸元へ向けられる。

「没落しかけた家を救うために、毎夜王に媚態を晒しているとは…

…実に見上げた献身ですな」

「全くだ。他に何の取り柄もない貧乏貴族が、身体一つで王室に取り入ろうなどと。身の程知らずなことですなあ？」

下劣な嘲笑が回廊に響く。彼らにとって私は、自分たちの政治の駒にならない目障りな存在なのだろう。刺々しい言葉が飛んでくるたび、家族を侮辱される悔しさに指先が震え出す。

（……言わせておけばいい。私は……妃の務めを卑しいものだなんて思わないもの……）

私は唇を噛み締め、彼らに毅然とした態度を貫こうとした。けれど、ふいに隣に立つノエルの気配が、急激に変わったことに気づく。
（……ノエル……？）

彼からは普段の温厚な空気は消え失せ、肌を刺すような冷たい殺気が放たれていた。ノエルの手が、音もなく腰の剣の柄へと伸びる。

「ノエル、だめ……っ」

私が慌てて彼の腕を掴もうとした、その時だった。

「何の騒ぎだ」

底冷えのするような冷徹な声が、回廊に響き渡った。

振り返ると、そこには側近を従えたジークハルト陛下が立っていた。金髪が陽光を浴びて氷のように冷たく輝き、赤い瞳が不快そうに細められている。

貴族たちが、弾かれたように姿勢を正した。

「へ、陛下！ 誤解なきよう、我々はただ、この者に王宮の作法を

――

一人の貴族が愛想笑いを浮かべて言い訳を口にしかけた、その瞬間だった。

陛下は彼らに歩み寄ることすらしなかった。ただその場に立ち止

まり、冷酷に目を細めただけで、途方もない魔力の重圧が空間を支配した。

「……っ！」

空気が凍りつき、息を吸うことすら困難になる。物理的な暴力にも等しい圧力が上からのしかかり、弁明しようとした貴族たちの膝が、まるで糸を切られたように石畳へと叩きつけられた。

先ほどまで余裕ぶっていた顔は恐怖に歪み、ガチガチと歯の根を鳴らしている。

「俺の庭で小賢しい真似をするな」

地を這うように低く吐き捨てられた言葉に、貴族たちは悲鳴に近い声を上げて石畳に額を擦り付けた。

「も、申し訳ございません……!!」

「……狸どもが。消えろ」

陛下は彼らを路傍の石でも見るかのような冷たい目で見下ろすと、それだけで退散させた。

這うようにして逃げていく貴族たちの背中を見送った後、陛下はゆっくりと振り返り、私を見下ろした。

先ほどの他者を平伏させる冷酷な覇気はなりを潜め、その赤い瞳には、ほんの少しだけ労わるような色が浮かんでいる。

「……不快な思いをさせたな」

「へ、陛下。私は……」

「お前は日々、国のために重責を果たしてくれている。……あのよ
うな輩の戯言など気にする必要はない」

それだけを静かに告げると、陛下は背を向け、再び歩き出した。
私は立ち尽くしたまま、遠ざかるその広い背中を見つめていた。

（なんて強大で……素晴らしい王なのかしら……）

腐敗した貴族たちをただの一言で震え上がらせる、圧倒的な威厳。それなのに、私のような者にも氣遣ってくださる。

あの不器用な優しさに触れるたび、この方を支えることこそが私の定めなのだと、深い尊敬の念が静かに込み上げてくる。

胸の奥が熱くなるのを感じながら、私は曲がり角に消えるまで陛下の背中を見つめ続けていた。

「……君は」

すぐ隣から聞こえたひどく渴いた声に、私はハッと我に返った。振り返ると、ノエルが立ち尽くしていた。いつも私に向けてくれる穏やかな笑みは完全に消え失せ、見たこともないほど冷ややかな目で、陛下の消えた回廊の先を見据えている。

「ノエル……？」

「あんな男の言葉一つで……君は、そんな顔をするんだね」

ぽつりとこぼれた声は、ひどく冷たく、まるで何かが砕けたように微かに震えていた。

「ノエル……？　どうしたの、顔色が……」

私に向けられたことのない酷薄な響きに、思わず息を呑む。

「……いや。なんでもないよ」

彼が瞬きをする、すつといつもの柔らかい笑みが戻ってきた。

けれど、細められた瞳の奥には、ひどく暗く、濁ったものがどろりと沈んでいるように見えた。

「さあ、もう散歩は十分だろう？　部屋へ戻ろう」

私の背中に添えられた手はいつも通り優しいはずなのに。

（……最近のノエルはどうしてしまったのかしら）

促されるままに歩き出しながらも、私は彼の横顔にある違和感に、小さく身震いした。

自室の扉を開け、重い木扉が閉まる音が響くと、心地よい静寂が私を包み込んだ。

先ほどの騒動で強張っていた肩の力が、ふっと抜ける。

ふわりとしたベッドの縁に腰を下ろすと、自然と脳裏に浮かぶのは、先ほどの陛下の広く、孤独な背中だった。

(……陛下)

冷酷なまでに他者を圧倒する魔力と、絶対的な威厳。私などただ魔力を注ぐための器に過ぎない。それでも、あの方が不意に下さった労いの言葉は、私の役目が決して無駄ではないのだと教えてくれた。

権力に群がる貴族たちに何と言われようと構わない。あの強大で孤独な王の重圧を、少しでも和らげることができるのなら。この身が擦り切れるまで、白の妃としての務めを全うしよう。

改めて胸の中で誇りを抱き締め、小さく息を吐き出した時だった。カチャリ、と陶器の鳴る音が静寂を破った。

「……お疲れ様。色々とあつて疲れただろう。さあ、温かいうちに」

ノエルが慣れた手つきで、サイドテーブルに白磁のティーカップを置いてくれた。

先ほど回廊で見せた恐ろしい顔は欠片もなく、そこにあるのはいつもの幼馴染の優しい微笑みだった。

ほっとして彼の厚意を受け取ると、湯気がゆらゆらと立ち上がり、甘い花の香りが鼻腔をくすぐった。

「君の好きな香りにしたんだ。少しは落ち着くと思うよ」

そう言って微笑むノエルには、先ほどの冷ややかな気配はもうどこにもない。目の前にいるのは、いつもの、私のことを誰よりも理

解してくれる優しい幼馴染だ。

「ありがとう、ノエル。あなたがそばにいてくれてよかった……」

「……君はいつも無理しすぎるからね」

彼は私の隣に腰を下ろし、大きな手で私の髪をゆっくりと撫でた。その手つきは、幼い頃に泣いていた私をあやしてくれた時と何も変わらない。

「——ずっとそばにいるよ」

耳元に落ちた穏やかな声が、さっきまで張り詰めていた私の緊張を静かに解いていく。私は小さく頷き、差し出された紅茶を一口、飲み干した。

——その瞬間、急に視界がぐにやりと歪んだ。

「……っ？」

カップを持つ手が重くなる。陶器が指先から滑り落ち、分厚い絨

毯の上に静かに沈んだ。

強烈な睡魔が、津波のように意識を飲み込んでいく。呼吸が浅くなり、身体から力が抜けて、そのまま崩れ落ちそうになった。

けれど、身体が床にぶつかることはなかった。

ノエルの腕が、私をしっかり抱き止めていたから。

「……ゆっくり……お休み……」

耳元で囁く声が、ひどく甘く、けれどどこか歪んでいる。

意識が混濁していく中で、彼の腕の力が強まった。逃げられないように、私の身体を完全に閉じ込めるような強さで。

「もう大丈夫。あんな男に、君は抱かれる必要なんてないんだ」

ノエルの言葉が、遠くの方で聞こえる。

彼の手が私の頬を撫で、ゆっくりと耳朶をかすめた。

「もう二度と……あの男のところへなんて返さないよ」

その囁きを最後に、私の意識は深い闇へと突き落とされた。

まぶたが、ひどく重い。

無理に目を開けると、視界に入ってきたのは見慣れない高い天井だった。

豪華なシャンデリアが吊るされているが、明かりは灯っていない。窓には分厚いベルベットのカーテンが隙間なく引かれ、外の光を完全に遮断していた。

「……ここ、は……？」

掠れた声を出そうとして、喉が焼けるように乾いていることに気づく。

(……どうして、こんなところに……?)

身体を起こそうとしたが、手足に力が入らず、そのまま枕に深く沈み込んだ。

ふと、ベッドの傍らに誰かが立っているのが見えた。

「……あ」

そこにいたのは、ノエルだった。その姿を見て、反射的に胸を撫で下ろす。この幼馴染は、いつだって私に安心を与えてくれる。

けれど——同時に、いつもの近衛騎士の礼装をノエルが身に纏っていないことに違和感を覚えた。

「おはよう。気分はどうだい？」

ノエルが、穏やかに微笑みかける。

たれ目を細めた柔らかい表情も、気遣うような声のトーンも、完璧に私の知る『優しいノエル』のままだった。

それなのに、私を見つめるアッシュグレーの瞳の奥だけが、光を吸い込むように暗く、じつとりと濁りきっている。

彼と目が合っているはずなのに、彼が見ているのは『幼馴染の私』ではないような、底知れない気味の悪さに背筋が粟立った。

「ノエル……？ここは、どこなの？私、お城に帰らないと……」

「

掠れた声を絞り出し、混乱したまま身体を起こそうとした。けれど、その瞬間、肩に大きな手のひらが置かれ、ゆっくりと、けれど抗いようのない力で再びベッドへと押し戻された。

背中が柔らかなマットレスに深く沈み込み、逃げ場を塞がれたまま、私は彼を見上げることしかできなかった。

「戻る必要はないよ。君はもう、自由だ」

「自由……？何の話をしているの。ノエル、今すぐここを出てお

城に戻りましょう」

混乱に突き動かされ、私は逃げるように身体をよじった。けれど、その手首をそっと握りしめられる。

決して乱暴な力ではないのに、それだけで私の動きは完全に縫い留められてしまった。

「戻る必要はないよ。……俺が君を攫ってここへ連れてきたんだ」
穏やかに、まるで日常の会話をするかのように告げられた事実、心臓が跳ね上がる。

「さ、攫った……!?何を言っているの……?」

私は呆気に取りられて、彼の手首を必死に掴み返した。

「冗談よね? 悪い冗談にしては質が悪すぎるわよ、ノエル」

ふふっと力なく笑いながら彼の顔を覗き込む。けれど、返ってきたのはいつもの柔らかな微笑みではなく、温度のない静かな眼差し

だった。

「……冗談に見える？」

その声の低さに、心臓が跳ね上がる。彼が冗談を言っているはずがないことに気づいた瞬間、血の気が引いていった。

「お、王妃を誘拐するなんて……っ、そんなの反逆罪に問われてしまうわ……っ！」

一気に血の気が引く。魔力の供給源である王妃の誘拐はこの国では重罪である。場合によっては処刑を免れない。とにかく早く城に戻らなければ、ノエルの命が危ない。

「お願い、ノエル、今すぐ戻って。まだ間に合うから。私が陛下に、あなたのことは関係ないって伝えるから……っ！」

私はノエルの手を振り払おうと身をよじった。けれど、彼は微動だにせず、ただじっと私の顔を見つめている。その瞳に宿る色は、

私が知っている穏やかな彼のものではなかった。

「処刑？ そんなもの、怖くなんかない。君さえここにいればそれでいい」

淡々と告げる彼の瞳には、冗談を言っている様子は微塵もなかった。焦りで心臓が早鐘のように鳴る。このままでは、もう後戻りできなくなる。私は彼の手首を掴み、必死に視線を合わせた。

「そんな、馬鹿なこと言わないで！ あなたは私のことを、可哀想だと思っているのね？」

きつと、優しいノエルは、私が王に虐げられていると思い込んでこんなことをしてしまったのだ。彼をこんな無謀な計画から救い出すには、誤解を解くしかない。

「私は無理やり抱かれていたわけじゃないわ……！ 自分の意思で王妃となり、自らの意志であの方の方に身を捧げているのよ……！」

言葉が口から出た瞬間、部屋の空気が凍りついたように感じた。

ノエルの瞳から、すっと温度が消える。

「……自分の意思で」

彼はゆっくりと私の手首から指を離し、ふっと自嘲気味な笑みを浮かべる。その表情に、それまで宿っていた親しみは完全に消え失せ、まるで見知らぬ男のような冷ややかさが漂った。

彼がゆっくりと一歩踏み出したかと思うと、両肩を掴まれ、そのままベッドへと押し倒された。

「っ、ノエル……!？」

背中が柔らかなシーツに沈み、自由を奪われる。今まで一度も乱暴な振る舞いをしたことのないはずの幼馴染が、私を完全に組み伏せていた。

「……そんなに、あいつのところへ、帰りたいの」

「……っ、ちがうわ、そうじゃなくて、私はただ――」

「なにが違うんだ……!」

ノエルが低く遮った。彼は私の両手首を片手で掴み上げると、退路を断つように頭上へまとめた。見下ろす瞳には、これまで見たこともないほど暗い色が沈んでいる。

「本心では……あの男に抱かれないと思っているんじゃないのか？」

私は一瞬、何を言われたのかわからなかった。

（……私が……陛下に……抱かれない……?）

その言葉の意味を理解すると同時に、カッと顔に血がのぼってくる。

そんな私をノエルは冷ややかな表情で見つめていた。

「へえ、そんな反応をするってことは凶星なんだね」

「ち、ちが……」

ノエルの顔がだんだん近づいてきて、鼻先が触れそうな距離で止まった。熱い吐息が唇に掛かる。

「……ノエル、お願い、一度落ち着いて私の話を聞いて」

「——今さら聞く必要なんてない」

彼は冷ややかに言い切り、そのまま視線を私の唇へと落とした。

「全部、聞いてたよ……君が扉の向こうで、あの男に鳴かされてるのを……毎日、毎日ね」

どこか哀しい色を帯びた声でそう呟いた。私を見下ろす瞳には哀しみの色が滲んでいる。

（……ノエル……どうして……）

何かを言い返そうとした私の唇は、そのまま強引に塞がれた。

「……んっ」

触れるだけの口づけではなかった。息もできないほど強く押し付けられ、貪るように唇を重ねられる。

苦しさに堪えかねてわずかに口を開いた瞬間、待っていたかのように熱い舌先が無理やり押し入ってきた。

「……っ、んう……っ」

くちゅ♡くちゅ♡と、口腔内の粘膜を執拗に絡め取られ、私はたまらなくなりもがきながら彼の肩を叩いた。けれど彼はそれを無視して、唾液が混じり合う淫らな音を立てさせながら、さらに深く口内を蹂躪する。

「ん~~~~……ん、んん……っ」

唇から逃げようとするたびに吸い付くように追いかけられ、熱い舌に絡め取られた。そのまま上顎をなぞるようにゆっくりと舐め上げられ、未知の快感に全身が震えた。

身体力が抜けていくのと同時に、ドレスの胸元に彼の指先が掛かった。

ビリッ、と布が裂ける不吉な音が響く。

「あっ……！」

露わになった鎖骨と胸元に、冷たい空気が触れる。ノエルは私のドレスを無造作に引き裂き、白い肌を晒させた。

「君は……本当に残酷だね」

低く掠れた声と共に、熱い指先が首筋に残る薄い痕をなぞった。そこだけを執拗に、擦り上げられ、私は小さく身悶える。

「ノエ……ル……」

「……俺に……あいつの記憶も痕跡も、すべて俺が塗り潰させてよ」

王がつけた印を塗りつぶすように、彼はそこに深く、牙を立てた。

「あ……っ！」

「君は毎夜あんなふうに喘いで……俺がどんな思いで扉の外に立っていたか、分かってないだろう？」

熱い吐息が耳元を掠める。

（そうだった……ノエルは、ずっとあそこで……）

妃の側に控える騎士として、扉一枚隔てた向こう側で、彼はずっと立っていたのだ。私が自分自身に職務だと言い聞かせ、誇りと呼んでいた振る舞いが、幼馴染である彼の耳にどう届いていたのか。そのことを改めて思い知らされ、胸の奥が締め付けられるように痛んだ。

「……もう、あんな男のことなんて考えられないようにしてあげる」

そう告げると、大きな掌が私の柔肉を掴み上げた。指先が形を変

えるほど強く揉みしだかれ、私は堪らず首を横に振って抵抗する。

「んっ……！ノエル……っ、だめ……っ」

「ここも、あいつに弄らせてたの？」

冷やかな声とは裏腹に、胸を弄る手つきはひどく執拗だった。

親指の腹が、硬く尖り始めた乳首をじっくりと転がし、コリ♡コリ♡と弾く。鋭い刺激が背筋を駆け抜け、腰が自然と浮いてくる。

「あ……っ、や、め……♡」

「嫌？ここ、こんなにピンって尖ってきてるのに？」

彼は嘲笑するように口角を上げると、空いた方の手で反対側の胸を包み込んだ。

もにゅ♡もにゅ♡くりっ♡くりっ♡

両側から同時に揉みほぐされ、さらに指先が乳首の根元までぎゅっ♡と強くつまみ上げる。じいんと甘い痺れが脳に突き抜ける。

「はっ、あ……んうっ……♡」

指先の刺激にどうしても気持ちよさを覚え始め、思わず身体をよじるけれど、ノエルはそれを許さないとでもいうように引き戻す。

そのまま上体を深く沈め、剥き出しになった私の胸元へと顔を寄せる。

熱い吐息が直接肌に触れ、粟立つ乳首がさらに硬く尖った気がした。

「……ノエル……だめよ……」

「……もう遅いよ」

れろお……♡

「ひゃ……っ♡」

じゅるっ、と濡れた音を立てて、ノエルは私の乳首を根元から深く吸い上げた。

じゅるる……♡ じゅる♡ じゅる♡

「んん♡」

予想以上の強い吸引に、身体が大きく跳ねる。

口内に閉じ込められた先端が、熱い舌先でじつくりと転がされ、じゅぶじゅぶと淫らな音を立てて舐めたり吸われたりしている。

「……あ♡や、ん、ああっ♡」

指で弄られるのとは違う、湿った熱い粘膜の感触に、足の先まで震えが走る。

「ノ、ノエルう……！♡」

「……乳首、吸われるの気持ちいいんだ？」

ノエルは離そうとしない。むしろ、吸い上げる力を強めて私の乳首を深く口に含み、ぢゅ♡ぢゅ♡と執拗に吸い上げ続けた。

「あ、ああ……っ、んんっ♡」

ふいに、吸い上げた乳首を鋭い歯でカリッ♡と軽く噛まれる。

「ひゃ!?!♡」

かすかな痛みが刺激となり、強い痺れがお腹の奥をじんとさせる。焦らし気味に歯を立てた彼は、そのまま乳首の輪郭をなぞるようにして軽く甘噛みし、じゅぷう♡ちゅぱっ♡とわざと濡れた音を立てさせる。

片方の乳首を口に含んだまま、ノエルの空いた手がドレスの裾へと滑り込んでくる。

太ももの内側をなぞる指先が、じりじりと秘部へと近づいていくのが感触でわかった。

「あ……っ、ノエル……やめて……っ!」

私は必死に腰をひねり、彼の手から逃れようともがいた。けれど、ノエルは私の太ももを強引に割り開いた。

「離して……！ダメよ……こんなこと……今ならまだ戻れるわ……！」

「もう黙って」

叫ぼうとした唇は、すぐに彼の熱い口づけに塞がれた。強引な舌先が口腔を蹂躪し、反論の言葉をすべて奪い去っていく。

（ダメ……！！このままじゃ、本当にノエルが罪に問われてしまう……！！）

脳裏に、陛下の顔が浮かぶ。王妃を誘拐し、辱めた罪。それがどれほど重いものか、私には分かっていた。このまま彼を受け入れるということは、彼を破滅の道に進ませるのと同じだった。

何としてでも、ここでノエルを止めなければならない。

私は涙を滲ませ、激しく首を振った。

「お願い、もうやめて……！！私は……あなたに抱かれたくない……」

……！」

叫びが静かな部屋に響いた瞬間、ノエルの動きがぴたりと止まった。

私を抑えつけていた腕からふっと力が抜け、身体がシーツの上に自由になる。安堵して息を吐こうとしたとき、彼が見せた表情に背筋が凍りついた。むしろ、彼から放たれる気配はさらに重く、暗く、底の見えないものへと変貌していた。

「……く、ふふ」

彼の口から漏れたのは、ひどく乾いた、壊れたような笑い声だった。

肩が微かに震えている。ノエルはゆっくりと上体を起こし、私を組み伏せたまま、冷え切った瞳で私を見下ろした。その顔には、ただ空虚な嘲笑だけが浮かんでいる。

「……そうか。やっぱりそうだったんだ」

「ノエル……？」

「——君は、本当にあの男のことを愛しているんだね」

頬に触れたノエルの指先には、体温が宿っていないように感じられた。

「……ずっと隣にいて、誰よりも君を見てきたはずなのに……俺のことなんて……どうでもよかったんだね……」

「違うわ！ 私は、ただ……っ」

「何が違うんだよ……!？」

ノエルが喉を震わせて大声をあげる。その声は、絞り出された悲鳴のように鋭く、私の鼓膜を揺らす。彼は私の両手首を再び掴み上げると、シーツに深くめり込ませた。逃げ場を完全に塞がれた私の視界に、絶望に染まった彼の瞳が映る。

「あんな冷血な男のどこがいいって言うんだ？ 君をただの道具として扱い、夜だって複数の妃を義務的に抱くだけの空っぽな男に、君は心まで捧げていたって言うのか……！」

「……っ、侮辱しないで……っ、私は王妃としての務めを——」
「務め。ああ、またその言葉だ」

ノエルは私の言葉を鼻で笑うと、そのままドレスの裾を乱暴に捲り上げた。

薄い下着が残された太ももに、夜の冷気が触れる。

「今日、その『務め』とやらを完全に忘れさせてあげるよ。……俺が、ね」

低く、宣告するような声だった。

彼は私の両足の膝裏に手をかけると、無理やり外側へと割り開いた。恥ずかしいほどに無防備な場所が、彼の視線に晒される。

「……っ、やめて……！ノエル、お願い……っ」

「お願い、か。……今までなら全部叶えてあげたけどね。でも、そのお願いだけは聞き届けられないよ」

彼はそう言い捨てると、濡れそぼった下着を容赦なく引き抜き、剥き出しになった私の秘部へと迷いなく顔を寄せた。熱い吐息が直接粘膜に触れた瞬間、身体がびくりと跳ねる。そのまま深く、貪るように顔を埋め込まれた。

「ひぁ……っ！？」

（嘘、こんなところを……っ）

心臓が大きく脈打つ。下腹部がキュッと締めまり、反射的に足を閉じようとしたが、ノエルに膝を強く押さえ込まれ、逃げ場を完全に失う。

れろおっ♡と濡れた舌先が、花びらの隙間をゆっくりと割って入

ってきた。

「んっ、ふぁ……あぁっ！」

ノエルの舌使いはひどく丁寧で、執拗だった。

さっきからじくじくと疼いていた小さな突起を捉えると、そこを吸い上げるようにして、じゅるるる……♡と淫らな音を立てる。

王との行為にあるような義務的な冷たさは、そこにはない。むしろ、私の反応のひとつひとつを確かめるような、繊細な愛撫だった。

「……っ、や、だめ、そこ……っ♡」

「ここ？ここがいいの？舌でいっぱい可愛がってあげるね」

ノエルは顔を離さず、鼻にかかった声で囁きながら、舌の先をさらに鋭く動かした。

コリコリ♡と、一番弱いところを舌先で転がされ、じゅるる♡と口内に吸い込まれる。

ぬる♡ぬちゅう♡と、粘膜同士が激しく擦れ合う音が耳に届くたび、頭の中が甘い痺れで満たされていく。

身体がびくびくと勝手に跳ね、シーツを握りしめた指先に力がこもった。

耐えようとする理性を嘲笑うように、抗いがたい快感が下腹部からじわじわと全身に広がっていく。

「ひ、あ……っ！んんっ、ふああ……っ♡」

舌先に捉えられた小さな突起が、激しく、執拗にねち♡ねち♡転がされ、じゅう♡と熱い粘膜が吸い付くたび、腰が勝手に跳ね、彼に押さえられた太ももが自然とガクガクと震え出す。

ふいに、彼が顔を離れた。銀色の糸のような蜜が、私の秘部と彼の唇の間でしどけなく伸び、ゆっくりと途切れる。

「……君のここ、甘くて堪えないな」

視界の隅に映った自身の姿は、太ももを無防備に割り開かれ、秘部から溢れた蜜でぐしょぐしょに濡れていた。幼馴染であるはずの彼に、最も見られたくない場所をまじまじと見つめられている事実、顔が焼けるように熱くなる。

（……こんな……なんてはしたないことを……っ）

羞恥心で身体が強張り、逃げ場のない視線から逃れるように、私は震える手で自分の顔を覆った。

「……君の陛下はここもちゃんと愛撫してくれたかい？」

鼻にかかった、ひどく熱い声だった。

ノエルは私の反応を確かめるように、指先で先端をぴん♡と軽く弾いた。

「っ、ああ……っ！♡」

「こんなに敏感に反応して……こんなに小さくて可愛いところを陛

下は可愛がってくれなかったみたいだね」

彼の言葉に、心臓が激しく脈打つ。陛下との行為に、このような愛撫はなかった。ただ淡々と、効率的に魔力を引き出すためだけに繋がっていたのだから。

「……見てよ。もう、こんなにぐっしり濡れてる」

そう言って、ノエルが指先で花びらの合わせ目をゆっくりとなぞった。ノエルはわざと私に知らしめるように、ぬとお♡ぬとお♡と割れ目に指を這わせた。

(……どうして……どうして……こんな……?)

自分でも自身の身体がこんなに反応してしまっていることが信じられなかった。

「口では拒んでいるのに、ここはこんなに欲しがっているよ」

嘲笑うような、けれどどこか切なげな声。

ノエルの指先が、さらに深く、蜜に濡れた割れ目へと潜り込んだ。くちゅ……♡と淫らな音が室内に響き、ノエルの指がぐっぐっ、と内壁をじつくりと押し広げていく。

「あ……っ、や、ひっ♡……あっ……♡」

「ほら、君の中は俺の指をぎゅっと締め付けてるよ」

彼はわざとゆっくりと指を抜き差しして、じっくりと中を愛撫した。長い指で内壁を搔き回されるたび、下腹部の奥がキュウと締まる。

「……んう♡も、やめ……」

「こんなに欲しそうなのに……まだ口先だけの抵抗続けるつもり？」

ノエルは私の両足をさらに大きく割り開くと、私の最も秘められた場所へと再び顔を埋めた。

「ん、あ……っ!?」

ぢゅぢゅぢゅう……♡と強い力で先端を吸いあげられた。

「ここはクリトリスって言ってね、女の子が一番気持ちよくなれるところなんだ」

耳元で甘く囁かれた直後、ノエルの熱い舌先が、ぷくりと腫れ上がった花蕾に直接ねっとり♡絡みついた。

「ひゃあぁっ!?!♡な、なに、だめっ、そこ、あ……やぁ♡♡」

れろおっ♡じゅるる……♡と、舌の腹で執拗に転がされ、尖った先端を強く吸い上げられる。自分でも見たことのない恥ずかしい部分を、幼馴染の彼にまじまじと見つめられ、あまつさえ口で貪られている。

(……だめ……気持ちいいなんて……そんなふうに思っちゃ……

♡)

「んんっ、ふぁ……あ……っ♡」

私は、ただただ、中を掻き回す指と、外側を責め立てる舌の、二つの動きに翻弄されることしかできない。

ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡

ぢゅ♡ぢゅぢゅぢゅ♡ぢゅぢゅうッ♡

強烈な快感が同時に押し寄せ、目の前がチカチカと白く明滅する。

「……お♡ノエルう……♡お、おかしくなっちゃうわ……！」

も、やめ……っ♡」

「いいよ、おかしくなって。俺の舌で、俺の指で……っ」

彼は口端を歪めて笑うと、ぷくりと腫れ上がった突起を唇に挟み込み、じゅぽ♡じゅぽ♡と音を立てて吸い上げ始めた。

「ひぁあ……ッ♡♡」

濡れた粘膜が密着し、口内で強く吸い上げられる感覚に、がくが

くつと腰が跳ね上がる。

ぢゅぽっ♡ぢゅぽっ♡ぢゅぽっ♡ぢゅぽっ♡ぢゅぽっ♡
ぢゅぽっ♡

ぢゅ♡ぢゅぢゅぢゅ♡じゅるるるうっ♡

唇で挟み込みながら執拗にしごき上げる快樂が限界まで高まった瞬間、下腹部に熱い塊が押し寄せ、一気に弾けた。

「あああ~~~~~ッ!!♡」

頭の奥が真っ白に染まる強烈な絶頂と共に、私の秘部から大量の透明な蜜が噴き出した。

ぴゅっ♡ぴゅるるッ♡♡と勢いよく溢れ出した体液が、ノエルの顔やシーツを容赦なく濡らしていく。生まれて初めての強烈な快感と、失禁してしまったかのような羞恥心で、私はガクガクと全身を痙攣させ、喉の奥でひくひくと息を乱した。

けれど、ノエルは顔を濡らした液体に嫌な顔ひとつせず、どこか恍惚とした表情だった。

「すごいな……こんなにいっぱい出して。俺の舌で気持ちよくなってくれたんだね？」

ノエルは陶醉しきった様子で、私の太ももに残る蜜を指先で掬い取った。その瞳には、得も言われぬ悦びの色が深く滲んでいた。

(……ノエル……)

甘い痺れに意識が完全に溶けそうになった時、私はふと我に返ったような心地になり、快楽に流されそうになる思考を必死に繋ぎ止めた。

これ以上を受け入れてしまえば、すべてが終わってしまうのだ。彼に大罪を背負わせるわけにはいかない。このままでは、本当に取り返しがつかなくなる。

「……やっぱり、だめよ……ノエル。こんなこと、許されるはずないわ……」

私は荒い息を吐きながら、ゆるゆると首を横に振った。

「お願いだから、もうやめて。あなたまで処刑されてしまう……っ！ そんなの耐えられないわ……！」

涙で視界が滲む。彼を失う恐怖が快楽を上回り、私は必死に彼の肩を押し返そうとした。

「それに……私の白の魔力は、陛下を支え、この国を守るためにあるの。この身も心も、すべてあの方に捧げると決めたのよ……っ」
震える声を絞り出した。それは、私の誇りを守り——そして、何より、大事な幼馴染を救うための最後の抵抗だった。

（……ノエルも、きつとわかって……）

ノエルの動きが、ぴたりと止まった。

——部屋の空気が、一変した。

先ほどまで私を熱く見つめていたノエルの瞳から、すべての温度と光が抜け落ちている。

「……そう」

暗く冷たい声だった。

「俺の指と舌でこんなに乱れて、潮まで吹いてよがったのに。……それでも君は、あの男を選ぶんだね」

「ちが、ノエル、私は——」

「だったら……君の誇りも心も、一度全部ぐちゃぐちゃになるまで壊さなきゃ」

ノエルが私の上に重くのしかかった。彼は自身の衣服を乱暴に緩めると、露わになった猛々しい熱を私の太ももの間に押し付けた。

「あ……っ」

蜜で濡れそぼった秘部の入り口に、硬い先端がぐりぐり♡と押し当てられる。その圧倒的な質量に、身体が強張った。

「あいつの記憶なんて、全部俺が上書きしてやるよ」

彼は低く囁きながら、ゆっくりと自身の熱を沈ませ始めた。ずぶ……と、粘膜を割って入り込む感覚が、じりじりと脳を痺れさせる。

「あつ……！ふ、ああ……っ♡」

内壁にひどく食い込んでくるその厚みに、呼吸が浅くなる。

陛下以外の熱を受け入れることへの背徳感が胸を締め付け、私は焦燥に駆られて手足をばたつかせた。

「……ふ。君は本当に残酷だね。俺の舌でこんなに蕩けておいて……まだあいつを求めてるなんて」

彼はわざと途中で動きを止め、私の最奥まで届きそうなほどの深さでじつと留まっている。

「……ん……」

ぐぐつと内側から押し広げられる圧迫感に、腰がふるふると震え出す。

「拒んでいるくせに、ここは俺を離さないみたい欲しがってるじゃないか」

ノエルはどこか愉悅を孕んだ声で囁くと、そのまま一気に突き入れた。

どちゅんッッ♡♡

「あっ……!?!♡」

子宮の入り口を直接突き上げるような衝撃に、背中がぐつと大きく反った。

「君の身も心も、あんな男なんかにくれてやるものか……!」

ノエルは容赦のない力で腰を打ち付け始めた。

ぱんぱんッ♡ぱんッ♡ぱんぱんぱんぱんッ♡♡

「あっ♡あっ♡ノエル♡だめよ……♡抜いてえ……♡」

「抜いてなんてやらない……!」

彼は私の腰をがっしりと掴むと、さらに激しく腰を打ち付けた。

ぱんぱんッ♡ぱんぱんッ♡ぱんぱんぱんぱんぱんッ♡♡

どちゅッ♡どちゅッ♡どちゅどちゅどちゅッ♡♡

肉と肉がぶつかり合う激しい音が、静まり返った部屋に淫らに響き渡る。

「あッ♡ひい、あああ~~~~……ッ♡♡」

あまりに深く、容赦なく最奥を連続して突き上げられ、私はただ情けなく喘ぐことしかできない。

「見てよ。中、こんなに熱くて……俺を離さないみたい、締まって……ッ」

「ち、ちが……っ♡ あっ♡♡ ああぁッ♡♡」

否定しようとした言葉は、激しい快楽に書き換えられた。

ノエルはわざと角度を変え、内壁のひととき敏感な場所をぐりぐりいい……♡と決るようにして押し上げた。

「あっ!?!♡ そこ、らめ♡ ああぁあッ!!♡♡」

「ここ?ここがいい?……もっと……もっと、いい声で鳴いて……ッ」

ノエルが愉悦に歪んだ笑みを浮かべ、さらに腰の速度を上げた。

ぱんぱんぱんぱんぱんッ♡

どっどっどちゅどちゅどちゅどちゅッ♡♡

容赦なく最奥を打ち付けられるたび、身体が激しく跳ね、シートが乱暴に擦れる。

「ひ、ぁ♡ あぁッ!♡ んッ♡ あ、あぁ~~~~ッッ♡♡」

激しい快感が波のように押し寄せ、意識が千々に乱れる。内壁を
ごりゅ♡ごりゅ♡抉り上げる熱い質量が、私の理性を完膚なきまで
砕いていく。

（——ダメ……こんなの……っ、ダメなのにい……ッ）

快楽に溶かされそうになる思考を必死に繋ぎ止めようとするが、
身体はとうに心を裏切っていた。ノエルは私の抵抗など意に介さず、
両足をさらに高く持ち上げると、そのまま自身の肩へ回させた。大
きく開かれ、恥ずかしいほど無防備に晒された秘部から、白濁した
愛液がどろどろと溢れ出し、彼の下腹部や太ももを淫らに汚してい
くのが嫌でもわかった。

「見てよ……こんなにぐしょぐしょだ」

彼は意地悪く囁きながら、わざと角度を変えて最奥を抉るように
腰を突き入れた。ごちゅんっ♡と重い衝撃が走るたび、内壁の中で

ますます溢れる蜜がじゅぷ♡じゅぷ♡と淫らな音を立てている。

「ひゃああ……ッ!?♡あ、おく、やらあ……ッ♡」

「嫌なんて、嘘だろう……!?“どんどん溢れてくるのに」

低く笑った彼がわざと腰を引くと、内壁をずるりと滑り降りた熱がじわりと空虚さを残す。焦らされた身体が、本能的にそれを追い求めてキュウと窄まった。

「そ、そんなこと……♡」

「——嘘つき」

耳元で甘い囁きが降ってきた直後、逃げ場を失った最奥まで再び熱い質量が叩き込まれた。

どちゅうう……ッッ!!♡♡

「ああ……ッッ!!♡」

子宮の入り口を直接叩き上げられた衝撃に、背中が大きくそり返

る。

そのまま髪入れず、止まらない速度で腰を打ち付けられた。

ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡

「認めなよ……っ、気持ちいいって……っ」

「ち、が……あああッ！！♡♡」

否定の言葉を紡ごうとするたび、深い突き上げに言葉が砕け、甘い悲鳴へと変わる。

ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡

激しい衝撃が、子宮の入り口を執拗に、そして正確に叩き続ける。肉と肉がぶつかり合う激しい音だけが、部屋全体を支配していた。ノエルは私の腰をぐっと掴み直すと、さらに腰の速度を上げた。

ぱんぱんぱんぱんぱんッ♡♡

「あああッ！！♡あああ~~~~ッッ！！♡♡」

もう、言葉にならない悲鳴が口から漏れ続ける。

視界が激しく揺れ、天井のシャンデリアがぼやけた光の輪となっている。

内壁をひたすら、ひたすら、猛烈な勢いで突かれ続ける。

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんッッ♡♡

どちゅんッ♡どちゅんッ♡どちゅどちゅどちゅどちゅッッ♡



「あ~~~~~……ッッ♡♡♡」

ノエルの額から滴り落ちた汗が私の胸元に落ち、流れていく。

「……あんな男には……こんな風に……抱かれたことないだろ……

ッ

「……っ」

否定しようとしても言葉にならない。あの方と繋がる夜はいつも

静まり返っていて、ただ淡々と義務を果たすだけの時間だったから

(……知らない……こんなの……知らない……ッッ♡♡)

どちゅうッ♡どちゅうッ♡どちゅうッ♡

「ああッ♡ああッ♡♡ノエル……♡ノエルう……ッ!!♡」

拒絶するはずの言葉はもう喉に上がってこない。代わりに漏れたのは、情けなくも彼の名を呼ぶ声だった。

「いいよ……もっと呼んで……ッ！俺の名前を、もっど、もっど……ッ！！！」

ノエルが喉の奥で、ひどく掠れた声を漏らした。

そのまま、彼は最後のひと絞りまで私から快楽を奪い取るかのように、鬼のような速度で腰を打ち付けた。

どどどどちゅうどちゅうどちゅうどちゅうどちゅうッッ♡♡♡♡

「ひ、あああつ!!♡だめ♡はげし♡お♡お♡お♡お♡」

…ツツツ!!♡♡
└

極限まで昂った熱に背筋が硬く強張り、つま先までピンと伸び切る。

「ほら、わかる？ 奥を俺のでとんとんつてすると、ぎゅうつて応えてくれてるの」

「あっ♡ ああ♡ わ、わかんない……♡」

ぐりぐり
いいい
……ツ
ツ
♡♡♡

「……おお……!!?♡」

彼の言う通りだった。内壁が彼を逃したくないとばかりに、ぎゅうう……と猛烈に締め付けているのが分かる。指先一つ動かせないほど蕩けていながら、身体だけが正直に反応していた。

「……わかってるくせに」

どちゅッ♡どちゅッ♡どちゅッ♡どちゅッ♡

最奥を執拗に叩き上げられる衝撃に、腰がびくん♡びくん♡大きく跳ねる。

「あ♡あ♡だ、だめっ♡ほんとに……♡それ♡奥とんと

んやめてえ……♡」

「なんで？ あいつには何回もこうされたくせに？」

耳元で囁かれた言葉を否定したいのに、唇からは甘い吐息しか漏れない。

(……あ♡も、なにも……♡かんがえ……られない……♡)

「あー……君の中を、俺の種でいっぱいにしなきゃね」

低く響いた声に、心臓が跳ね上がる。その意味を理解した瞬間、身体のコから恐怖と期待が混ざり合った震えが走った。中に出される——それは、もう後戻りができないということだ。

「待って……！ それだけは……ダメ……っ！」

私は必死に腰を引いて拒絶しようとした。けれど、ノエルは私の逃げ道を完全に塞ぐように太ももをさらに割り開き、がっしりとその腰を固定した。

「いいや、ダメなんかじゃない。君が大切にしてるその矜持ごと、全部俺のものに……ッ」

冷やかな宣告と共に、猛烈な速度の突き上げが再開された。

ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱん……ッ♡♡

どどどどちゅ♡どちゅどちゅどちゅ……ッ♡♡

「お♡お♡ま、まってえ♡ら、めえ♡あ、ああ♡い、や

あゝ……ッ♡♡」

絶叫さえもかき消すほどの激しい衝撃に頭が揺れ、口から漏れるのは情けない悲鳴だけだった。

どちゅんッ♡どちゅんッ♡どちゅんッ♡どちゅんッ♡どちゅんッ♡

ノエルが最後のトドメとばかりに、私の最奥へ一気に自身の猛りを突き刺した。

「……おッッ!!♡♡」

同時に、熱い、どろりとした質量が、内壁の隅々にまで激しく注ぎ込まれる。

どくっ♡どくんっ♡どくどくどくっ♡♡

お腹の中が、彼から溢れ出した熱で満たされていく。

その圧倒的な充足感と、身体の芯まで貫かれた絶頂感に、意識が朦朧とする。

肺の中の空気がすべて絞り出されたかのように、ただ口を半開きにして、ひう、ひう、と浅い呼吸を繰り返した。

「……はあ、……ふう……っ」

ノエルの荒い呼気が首筋にかかる。

彼は私の肩に重くのしかかったまま、繋がった部分からじわりと漏れ出す熱い蜜と彼自身の白濁した液体が混じり合い、太ももを濡らしていくのを感じていた。

意識がゆっくりと現実へと戻ってくる。

乱れた呼吸。汗ばんだ肌。そして、今しがたまで私を蹂躪していた男の体温。

(……どうして、こんなことに……)

涙で滲んだ視界の端に、シーツに刻まれた激しい爪跡が映った。誇り。忠誠。王妃としての責務。

そうやって自分に言い聞かせてきた壁が、ほんのひとときの間に、完膚なきまで砕かれた。

身体の奥底に残る、疼くような充足感——それがひどく恐ろしか

った。

「……あいつの、痕跡は……全部消えたかな……？」

ノエルの声は、先ほどまでの激しさが嘘のように静かだった。

けれど、その声には、底の見えない執念が滲んでいる。

彼はゆっくりと身体を離すと、濡れそぼった私の太ももを、まるで宝物を愛でるように指先でなぞった。

「……っ……」

指先一つ動かす気力が残っていない。ただ、彼に掻き回された内側が、まだ熱を持って脈打っているのが分かった。

ノエルが私の頬に手を添え、ゆっくりと顔を上げさせた。

その瞳に映っているのは、もう王宮で背筋を伸ばしていた『白の妃』ではない。

ただ、快楽に蕩け、彼にすべてを暴かれた一人のはしたない女の

姿だった。

「——もう、逃げられないよ」

ふわりと口角が上がったその笑みは、いつもの優しい幼馴染に似ていた。けれど、瞳の奥には獲物を追い詰めた捕食者のような色が宿り、決して逃さないという檻のような響きを帯びていた。

私は彼を見つめたまま、小さく口を開けた。

何かを拒絶しようとしたのか、それとも、彼を呼ぼうとしたのか。けれど、言葉になる前に、再び彼の熱い唇が私の思考を奪い去った。